

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学	研究科 ドイツ文学	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・ドイツ文学専攻・後期4年	中村 澄子	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	前田 良三	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	亡命文学・難民文学におけるクラウス・マンー反ナチス活動と作品分析を中心に		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2010年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

クラウス・マンは1933年の亡命後すぐに亡命雑誌を編集し、多くの亡命作家に作品発表の場を与えた。また自ら数多くの亡命小説を発表し、国家機構の外でドイツ文学の水準を保つことに尽力した。亡命地におけるこうした活動にも拘わらず、従来もっぱら父親であるトーマス・マンとの比較において、父の文学の傍流として研究されてきたに過ぎない。本研究は、「亡命文学」という視点を明確に打ち出すことにより、これまで取り上げられてこなかったクラウス・マン文学の現代的意義を積極的に論じようとするものである。分析の対象とする小説『火山』(1939)は、作者の亡命体験の集大成であり、「亡命」・「空間」・「言語」、即ち文化の越境という視点から、20世紀ドイツ文学の一面を捉えることができると考えている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 亡命 ] [ クラウス・マン ] [ 言語 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、広義にはドイツ 20 世紀文学を対象とし、狭義にはドイツ文学の領域を扱うものである。研究の対象であるクラウス・マン (1906 - 1949) は、自分が一人の亡命者として生きた難民の問題を至近距離から観察し、文学に結晶させたのだが、日本では本格的な研究はまだ成されていない。短い人生でエッセイ、短編小説、戯曲、長編小説、自伝、論文と多くのジャンルにわたる作品を遺したが、その翻訳も日本では数少ない。特に小説は二冊程度に留まっている。これは翻訳書が絶版になったか、未公開であるかが原因なのだが、彼の亡命の受難を通し形成された視点は、「とにかく生き延びること」を呼びかけている。戦争による難民という例外状況を小説化した『火山』は、作家自身の体験に基づくものであり、革命、世界大戦、東西の冷戦の崩壊、テロの恐怖等を経験した激動の 20 世紀の貴重な報告の 1 つとして位置付けることができる。以下順を追って研究の過程を説明する。

**1) 基礎研究**

本研究は、修士論文で取り扱った小説『朗読者』(ベルンハルト・シュリンク、2000) の隠されたテーマの一つである「移民」問題をスタートとしている。小説の女主人公ハンナは、ルーマニアからの貧しいドイツ系移民で、後に強制収容所の看守となり戦後ナチスを裁く裁判にかけられる。文字教育を受けないままルーマニアという国家機構からはじき出され、ナチスという国家機構の中で、それとは意識しないで悪の側になってしまう主人公の運命は、移民の困難さを象徴するものである。この作品はいわば東西ドイツ統一後の世界から発信した作品である。

翻って、博士課程後期での研究は、こうした世界大戦によって生じた、移民、亡命、難民という 20 世紀を象徴する政治的、社会的現象を自ら体験した人の小説を通して、亡命者の生を見つめる作品分析を行おうと考えた。

20 世紀ドイツ文学の大きな特徴は、1 つには 19 世紀の流れを汲む母語の達人によって創造された作品と、戦争や革命によって母国を去った人による亡命文学(難民文学) という二つの大きな流れがある。こうした大きな歴史のうねりの中で文学を書くという行為が、国家共同体の中でその国の文化を一つの言語で書くことなのか、あるいは異なる言語や文化の間で書くことなのか、こうした現代のモデルを亡命作家は示している。

まず、私の取り組みは、ヒトラーの政権掌握後すぐにパリに亡命し、その後多彩な交友関係を軸に、アムステルダムで亡命雑誌を立ち上げ他の亡命作家の先頭に立って、ペンを武器にナチスに抵抗した作家クラウス・マンの文学活動を調べることから始まった。具体的な作品としては、様々なエッセイや小論文、小説への感想が織り込まれている回顧録『転回点』を中心にして研究した。亡命に至る経緯、著名な作家トーマス・マンを父や伯父(ハインリッヒ・マン)に持ったという宿命からくる人知れず屈折した苦悩、しかし反面こうした持って生まれた特性が、亡命雑誌『結集』はもとより、亡命中の様々な反ファシズムの文学活動を同世代の作家に比べて幅広いものにしたことが分かった。

**2) 小説分析**

次にクラウス・マンの反ナチスの文学活動が実際どのように小説に反映されているのかを考察した。クラウス・マンは 19 歳で小説を書き始めたが、当初から政治的な作家ではなかった。亡命以前の 27 歳頃までは、同性愛をテーマとした審美的な作品を書いていた。反ナチスへの意思表示を濃厚に作品化したのは亡命後の 1933 年以降で、亡命雑誌『結集』を刊行し、他の亡命作家に作品発表の場を与えた。自らも、1933 年から 1939 年までの間に 6 つの小説を発表した。またアメリカ亡命後は英語で短編小説、自伝、エッセイを書いた。この中で最も評価の高い小説はナチス支配下の演劇界で、政権にコミットして出世する舞台俳優の精神的墮落を描いた『メフィスト』(1936) と、亡命者の生活をつぶさに描写した『火山』である。前者は、実在の俳優をモデルにしたとして戦後裁判沙汰になった。しかもそのモデルがクラウス・マンの近親者だったため、問題は複雑で、この小説を書くにあたっては近親者ばかりではなく、自分自身の嘗ての生活も俎上にのせなくてはならなかった。しかしこうまでして書かなくてはならなかった亡命作家としての思いに焦点を絞れば、長引く亡命生活でナチス・ドイツを糾弾する政治的機能を持った作品を書かねばならなかったからであろう。この作品を反ナチスへの抵抗への決意の表明だとすれば、『メフィスト』から 3 年後に発表された『火山』は、アメリカ亡命後も執筆を続けた作品であり、ドイツ語で書くことへの決別の書であると同時に、ドイツへの決別とも受けとれる。

またクラウス・マンは『火山』執筆直前に『鉄格子』というバイエルン王ルートヴィヒ 2 世を主人公にした、審美的で自己破滅への道をたどった王の物語を短編小説にしている。美を愛し、築城の情熱ゆえに国家の財政を傾け、囚われの身となった王の運命を、国を追われた難民に捉える試みをして、小論文として院生冊子 WORT31 号(2009)に発表した。

**研究成果の概要 つづき**

こうして回顧録『転回点』、中編小説『メフィスト』、短編小説『鉄格子』、長編小説『火山』と読み進めたが、クラウス・マンの作品の大きな特徴は、その人物形成にあることが分かった。クラウス・マンの研究者が指摘するように、彼は最初の短編集『人生を前にして』(1925)でも既にそうであったように、物語の人物形成を行うにあたっては「自分の周辺から取り出した真実の現像」にまでしばしば遡ってキャラクターを得ようと努めたのである。このように作家と文学創造上の人物との問題はクラウス・マンの場合しばしば批判と省察的にされるのだが、それは作中人物の一部が実際に実在の人物に基づいて作られているからであり、自分の多感な経験を喚起して描写しているからである。クラウス・マンの小説は、工夫をこらした登場人物や筋のからくり重点を置いていない。素直に自分が見聞きし、身近にいた人物の中から題材を得、自己の情熱と魂で満たした。『メフィスト』に関しては、芸術家とファシズム独裁という時代の特殊性が作品の核心部分を形成している。

クラウス・マンの小説や自伝を通して一貫している思想は「時代の危機」である。クラウス・マンが逼迫した時代と市民社会の危機を作品化したのが大河小説ともいえる『火山』である。この作品は、日本語の翻訳がないため原書を読む作業から始めたが、554 ページにのぼる膨大な作品であり、物語の解明にはもう少し時間を要する。

**3) 資料調査 (海外調査)**

・ マールバッハ文学史料館 (本史料館には約 70 万冊にのぼるドイツ文学者や出版社の遺作が所蔵されている)

日本では入手し難い新聞・雑誌・論文集などへの寄稿、書簡を中心に、エッセイ、日記、亡命雑誌等の資料を当史料館において収集し、調査した。渡航前に、オンライン・OPAC で所蔵状況を調査して、当地ですぐ読めるように所蔵資料の一部を予約した。

**① クラウス・マンの亡命時の様子を伝える資料**

Brife und Antworten (1922-1949): Hrg. von Martin Gregor-Dellin. 『クラウス・マン書簡集 1922 年 - 1949 年』(編集 マルティン・グレゴール・デーリン)

亡命をめぐる一連の出来事は、小説『メフィスト』と『火山』に虚構化されている。その事実関係の基となる資料で、国内に留まった友人との往復書簡、亡命雑誌刊行にあたっての大物作家への依頼の手紙、親友に宛てた手紙等が収められている。

**② クラウス・マンの性的嗜好、私生活、反ナチスの文学活動を知る資料**

Heute und Morgen: Hrg. von Martin Gregor-Dellin. 『今日と明日』(編集 マルティン・グレゴール・デーリン)  
クラウス・マンの死後 20 年経った 1969 年に出版されている。

**③ 作者の死後家族や友人によって綴られたエッセイ集『追憶』: Zum Gedächtnis.****④ 亡命を扱った大学生用の文学テキスト**

Hochschulschriften Literaturwissenschaft Band 26. Weltbürgertum-Exil-Heimatlosigkeit.

・ 以上の調査から本研究の成果は次のようにまとめられる。  
クラウス・マンの亡命中の文学活動については、広く資料を集め調査することができた。こうした資料や文献から、クラウス・マンは父トーマスへの愛と反抗の狭間で、また時代の危機の中で亡命を境に、自己の形姿と文学的地位を築き上げていったと考えられる。これは、旅行、冒険、講演、企画、亡命、恋愛と多忙さにも拘わらず、そうした生活の一コマを記述し、作品に遺すという、活動的で、きっちりとした生涯を送った作者の人生の証左であると言える。次に、作品論の関連からいえば、日本でのクラウス・マン研究の殆どは、その政治的・社会的活動ばかりが強調されており物語論等の、文学作品分析の報告は見当たらない。この点から、今ある現実の姿から文学を書き、一時代の亡命文学の地位を築いた作家の作品解釈をすることは、クラウス・マン研究の幅を広げることになるのではないかと期待している。

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④  その他 (学会発表、 研究報告書の印刷等)

2010年度の後期研究報告書において、キーワードの1つである「言語」の問題を取り上げ「亡命における言語の接触」と題して考察した。以下概要を記す。

研究報告書では、故郷を喪失し、「周縁の人」となって暮らすことを余儀なくされた亡命者の緊急の課題「言語とコミュニケーション」に光を当てた。

分析の対象としたのは、3部構成の最初の1部に限った。『火山』の第1部(3章構成)では、多様な国籍からなる亡命者の集団が、母語と切り離され、異なる言語の前に立たされた時に生じる深刻な問題を取り扱っているためである。

クラウド・マンの描写は、亡命者の生き方の是非を問うのではなく、故郷を追われ、仕事を失い、「言語」を失った人びとの心理を詳細に記述し、「追放」と「喪失」それ自体が招く受難を、亡命者の物語の出発点としている。